

美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開(シ04)

目 的 絵画や彫刻、工芸といった美術作品は、その表現のあり方、制作に用いられた技術、そして利用された素材などが複合し一体となって成立したものである。本プロジェクトでは、こうしたそれぞれの構成要素がどのような実態を持ち、またどのように関わりあっているのか、関連する諸分野を広く渉猟しつつ多視点的に分析し、その関係の解明を目指すものである。こうした研究の実施により、美術「作品」に対するより深い理解の醸成が期待されるであろう。

成 果 ○螺鈿及び漆器類に関わる調査研究等

- ・2019(平成31)年4月16日・同(令和元)年7月2日・9月6日、東京国立博物館にて唐代琴、南蛮漆器等の調査、7月11日、文化庁分室にて工芸部門調査官立ち会いで同所蔵蒔絵棚の調査、8月14日、サントリー美術館において南蛮漆器や蒔絵棚の調査、9月5日、大阪府岬町理智院、尼崎市寶樹院にてそれぞれ漆塗厨子の調査、2020(令和2)年1月22-23日に知覧博物館ほか南薩摩地域で保存科学研究センターと琉球漆器の共同調査を行った。

○研究成果公開

- ・6月22~23日、文化財保存修復学会第41回大会(帝京大学)にて、個人蔵漆器の研究成果を保存科学研究センターと共同で、「琉球漆器 朱漆楼閣山水人物箔絵盆の科学的調査」としてポスター発表。甲賀市水口所在十字形洋剣の研究成果を第25回ICOM(国際博物館会議)京都大会2019 ICFAセッション(共同発表者永井晃子氏、9月3日)、第53回オープンレクチャー(11月1日)、水口町郷土史会(同月9日)にて講演・報告した。またこの成果については各種報道で広く周知された。9月24日開催の第6回文化財情報資料部研究会において小林公治が「南蛮漆器成立の経緯とその年代—キリスト教聖龕を中心とする検討—」を、12月24日の第8回文化財情報資料部研究会にて林佳美氏が「日本中世のガラスを探る」と題し発表し、12月に韓国国立中央博物館が刊行した『保存と復元の世界 螺鈿漆器』に論文を寄稿した。

○研究データの整備と公開

- ・『美術研究』バックナンバーデータについて検索情報を追加整備し、利用者の検索に対する便宜促進と情報流通を図った。また、155号以前を対象とした検索用キーワードの抽出作業を開始した。東芝国際交流財団からの助成を受け、小山真由美著『南蛮漆器考』(2019年中央公論美術出版刊)の英訳事業を進めた。また、柳沢孝撮影スライドフィルムのDB化作業を継続して実施した。

- 論 文**・小林公治：「東アジア螺鈿史の観点から見た高麗螺鈿の成立」『美術資料』95 pp.43-195 19.6
 ・神谷嘉美：「南蛮漆器を中心とした平時絵技法と材料に関する検討」『美術研究』429 pp.43-64 20.1ほか一件
- 報 告**・山府木碧、倉島玲央、犬塚将英、早川泰弘、小林公治：「琉球漆器 朱漆楼閣山水人物箔絵盆の科学的調査」文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集 pp.166-167 19.6
- 発 表**・山府木碧、倉島玲央、犬塚将英、早川泰弘、小林公治：「琉球漆器 朱漆楼閣山水人物箔絵盆の科学的調査」第41回文化財保存修復学会大会 19.6.22
 ・KOBAYASHI Koji and NAGAI Akiko：「The Minakuchi Rapier, European Sword produced in Japan」第25回ICOM(国際博物館会議)京都大会2019 ICFAセッション 19.9.3 ほか3件

研究組織 ○小林公治、小林達朗、二神葉子、塩谷純、江村知子、小野真由美、安永拓世、橘川英規、小山田智寛、野城今日子(以上、文化財情報資料部)、佐野千絵、早川泰弘(以上、保存科学研究センター)、中野照男、田所泰(以上、客員研究員)